



みどりの風

平成27年12月1日発行
校報 第525号
〔みどりの風 第68号〕
練馬区立関町北小学校

学校で一番広い場所は？

校長 大野 泰弘

「関北の森」の木々の葉もずいぶん色づいてきましたが、中には先日の学習発表会で5年生が発表した「葉っぱのフレディ」の如く、木々の枝を離れ、「いのちの旅」に出かけている葉も見られます。

その学習発表会には、のべ1268名もの保護者、ご家族、そして地域の皆様方のご参観をいただき、子どもたちの熱演に温かい励ましの言葉や拍手を賜り、有難うございました。厚く御礼を申し上げます。子どもたちが、今回の学習発表会を通して得られた達成感や満足感、あるいは一体感や自信などをこれからの実生活の中でしっかりと生かしていってくれるものと期待しております。

ところで、なぜなぞを一問。「学校の中で、一番広い場所はどこでしょう？」

多くの子どもたちは、大人もそうかもしれませんが、この答えを「校庭」と言うのではないのでしょうか。確かに、面積という点では、校庭は学校の中で最も広いスペースということになります。

しかし、これはなぜなぞです。単に面積ではなく、「過去・現在・未来」という時間、「西洋も東洋も」、「海も空も」という空間、「見える事象と見えない心」、「フィクションからノンフィクションまで」、「文学から自然科学まで」、そういう多様な視点から眺めると、それらの全てを体験できるのは「学校図書館」ということになります。つまり、時空の広がり、ジャンルの多様性等々、様々な世界を旅する広さをもっているのは「学校図書館」であると考えてもいいのではないのでしょうか。

今月は、今年度2回目の読書月間となります。4年前になりますが、この紙面で、「三余」という言葉にふれたことがあります。その中で、「三余」とは、「中国の古くからの言い伝えで、読書に適した季節として『冬』・『夜』・『雨の日』（雪の日を含む）があり、読書に向いているのは秋に限ったことではない」という意味であることをお伝えしました。

読書は、子どもたちにとって「心の栄養素」です。子どもたちは、本を読んでいるとき、心の中で登場人物と様々な対話をしたり、また、その情景を想像したりしています。本に出てくる登場人物と一体になり、喜んだり、悲しんだり、いろいろな思いを共有することもできます。また、自らが困難や試練に出会ったときに、どのように乗り越えればよいか、その道しるべとなることもあるでしょう。さらに、高学年になれば、作者や筆者と対峙して、自らの考えを深めたり、批評的に読んだりすることもできるようになります。読書活動は、単に知識を増やすだけでなく、子どもたちが生きていくうえで大切にしていってほしい「感じる心」・「豊かな心」・「考える力」などを育ててくれる活動であると言えます。

先日、昨年度の研究発表会の折りにご講演いただいた詩人であり児童文学作家の工藤直子先生と再会し、お話を伺う機会がありました。その場で、工藤先生は、「誰にでも、子どものような感性をもって言葉の世界を楽しんでいた時があります。大人が子どもに接するとき、論理的な文章を学ばせるときはサポートしてあげてほしいですが、詩や俳句等の感性にかかわるときには、『教えよう』という部分を外し、同じ目線で接してあげてほしいです」とおっしゃっていました。

工藤先生の言葉にあるように、子どもたちが感性を素直に伸ばしながら、言葉の豊かさ、奥深さ、素晴らしさなどを取り取っていくためにも、物語や詩などの本との出会いは貴重なものになってきます。

そして、その本との出会いの場となる本校の「宝島図書館」には、多くの保護者の方の熱い思いが詰まっています。昨年度の研究発表会の折には、図書ボランティアの皆様が来校者向けのパネルを作成していただきましたが、その圧倒的な質量は、今でも脳裏に焼き付いており、多くの方々に本校の読書活動の充実ぶりを感じ取っていただくことができました。

今年度の読書月間の中では、読み聞かせの会の保護者の皆様による「読み聞かせ」のほかに、ねりまお話の会の方による「おはなしの会」、公立図書館との連携による「ブックトーク」、「本の探検ラリー」などが予定されています。本は子どもたちの友達です。これからも子どもたち一人一人が心の扉を大きく開き、「宝島図書館」でたくさんの本の世界を旅しながら、登場人物との多様な出会いを楽しんでくれることを願っています。そして、年末年始のご多用の折りではありますが、読書月間後の冬休みにも、ぜひ子どもたちに「読書のすすめ」をしていただけますと有難く存じます。

この一年間、皆様には本校の教育活動の充実に向けて、ご理解とご協力をいただき、有難うございました。来年も引き続き、子どもたちを温かく見守ってくださいますよう、お願い申し上げます。